

「資本論を読む会」便り

No. 7
2016.1.15

新年おめでとうございます。

とは言え、中東情勢、南沙諸島、消費税増税など波瀾含みの年明けでした。こうした表面に現れたいろいろな問題の根底にあるのが経済です。経済の法則を知り、日本や世界が抱える問題の本質を把握することは、私たちが何をなすべきか正しく見通す基礎になると思います。資本論からこの社会の本質について学ぶべく、今年も頑張りましょう。

◆復習ノート

編集人の復習ノート。すべての議論を紹介しているわけではありません。小見出し直後の「である」体の文章は原文やレジュメの引用や要約などです。便宜上、段落番号を本文の字下げごとに付けています(大月書店 全集版資本論による)。

第3節 価値形態または交換価値

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

一 価値表現の両極 相対的価値形態と等価形態 (続き)

20エレのリンネル = 1着の上着
(相対的価値形態) (等価形態)

【第3段落】 「相対的価値形態と等価形態とは、…」

相対的価値形態にある商品と、等価形態にある商品の関係

- ① 不可分性: 密接不可分な関係にあり、互いに属しあい制約している
- ② 対極性: ・リンネルの価値は別の商品によって(=相対的に)のみ表現できる。
 - ・相対的価値形態は別の商品が等価形態にあることを前提とする。
 - ・等価形態にある商品は、価値表現の材料となっているだけである。

1つの商品が、相対的価値形態にあると同時に等価形態にある、ことはない。

この段落の議論で、「=」の左辺(リンネル)と右辺(上着)を入替えると意味が変わること、左辺のリンネルは右辺の上着によって相対的に価値が表現されていること、が確認されました。1着の上着を金何円と変えても、やはりリンネルは相対的価値形態にあります。

等式の左辺と右辺を入れ換えると意味が変わる、というのが分かりにくいところです。 $6 \div 3 = 2$ と $2 = 6 \div 3$ は同じじゃないか、と、普通思いますから。

2つの式を、日本語では分かりづらいので英語で読むと、*six divided by three equals two*, と *two equals six divided by three*, となり(独語も似たようなものでしょう), 2つの文が主張する内容は区別されます。構文はどちらもSVO(主語+動詞+目的語)で同じですが、主語と目的語が入れ代わっていて逆関係です。「等しい」という関係の性質上一方の式が正しいければ他方も正しい式となりますが、このことが、どちらも同じという印象を与えるものと思

われます。

相対的というのは、他の商品と比較して、ということでしょう。物体の重さも、他の物体(キログラム原器)の重さと比較して〇〇kgと表現するのであって相対的です。が、この場合わざわざ相対的とは言いません。原子の重さ(質量)を表わすのにkgを使わず、質量数12の炭素原子の重さを12として別の原子の重さを表わすことがあります。これを相対原子質量と言いますが、相対的価値形態というネーミングと似ています。

【第4段落】 「もちろん、20エレのリンネル= …」

逆関係とは？

20エレのリンネル = 1着の上着

という式は、

1着の上着 = 20エレのリンネル

という逆関係を含むが、最初の式はリンネルの価値を、後の式は上着の価値を表わす。

報告者から、「持主」論で批判する立場の人もいる、との指摘がありました。等式は、商品の持主が別の商品と交換したいという欲望、その分量の商品となら交換してもよいという意志を表わしており、マルクスにはこの視点が欠けている、という批判です。しかし、ここで問題とされているのは、たくさんの商品が交換されるという事実の内に、つまり商品と商品の関係の内に、商品が持つ目に見えない価値を表現する仕組みが隠れており、それを明らかにすることです。

あと、逆関係とは何かで議論がありました。

報告者から参考として、資本論初版の付録の紹介がありました。因みに参加者持参のテキストは、出版社・訳者はいろいろですが、すべて第4版でした。

【第5段落】 「そこで、ある商品が相対的価値形態にあるか、…」

価値形態における商品の位置によって、商品が相対的価値形態にあるのか、等価形態にあるのか、その役割が決まる。

初版本では、「相対的価値と等価物は両方ともただ商品価値の諸形態であるにすぎない。」といい、上記の式においては「リンネル価値が相対的に表現される。それだからリンネルは相対的価値形態にあるのであるが、他方、同時に、上着の価値は等価物として表現されている。それだから、上着は等価形態にあるのである。」

初版本からの紹介がありましたが、この部分のコピーが欲しいとの声があり、後日、報告者がタイプしたファイルを参加された方々にお送りしました。

そのほか、左辺にある商品の価値が右辺にある商品のその姿で表わされている、ということについて、いくつか質問が出されました。

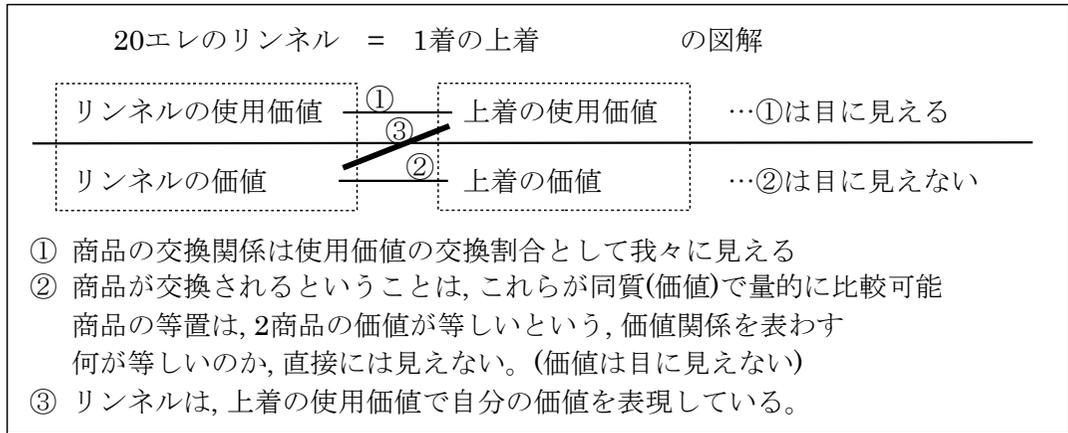
二 価値表現の両極 相対的価値形態と等価形態

a 相対的価値形態の内実

【第1段落】 「一商品の単純な価値表現が…」

価値関係を量的な面からはなれて考察(同等性関係)

- ・1つの商品の単純な価値表現が、2つの商品の価値関係のうちどのようになっているかを究明する。
- ・リンネルの価値を表現するためにリンネルは上着と等値関係に入る。
(この関係を価値関係という)
- ・リンネルは、リンネル自身とは異なる種類の商品、上着を等値する。
これにより、リンネルは、上着はリンネルと同じ性質のもの、同じ実体のものであることを示す。



(レジュメの図を見やすく変えてあります)

量的な面から離れるということは、

ここでは、 20エレのリンネル = 1着の上着 ではないということかという質問が出たかと思えます。レジュメの図解(上図)から分かるように、分量のことはさておき、量の種類(つまり質)に目を向けようということだと思います。

「人々は、いろいろな物の大きさはそれらが同じ単位に還元されてからはじめて量的に比較されうるようになるということを見落としているのである。ただ同じ単位の諸表現としてのみ、これらの物の大きさは、同名の、したがって通約可能な大きさなのである。」という記述も分かりにくく、質問もありました。次のように考えたらどうでしょうか。

「物の大きさ」… これは、物の分量、と言い換えると良いかと思われます。

「同じ単位」…… 文字通り、kgとかm³とかいった単位、のことと思いますが、それ以前に、量の種類(重さとか体積とか)が同じである必要があります。

「還元」…………… 空気の体積と鉄の重さは比較できませんが、空気を重さで表わせば比較可能です。Aさんの体重とBさんの身長とは比較できませんが、Aさんの身長ならBさんの身長と比較できます。この場合、体重を身長に「還元」したとは言えません。量の種類が同じでなければならない、ということでしょう。

「同名」…………… 単位名が同じ、あるいは、量の種類が同じ、ということでしょう。

「通約」…………… 通分のこと(広辞苑)。数として大小比較可能ということでしょう。

【第2段落】 「20エレのリンネル=1着の上着…」

リンネル=上着 が等式の基礎 (質的な等置を見ている)

リンネルと上着という2商品は同じ質に還元されること。その上で、リンネルと上着が量的に比較されている。

どういう等質性か？ つまり、同じ質というその質は何かという質問がありましたが、商品の価値という質です。また、この段落の主旨は、等式を価値として見るんだということの宣言ですね、という指摘がありました。

関連して、「=」は、リンネル所有者が上着を欲していることの表現ではありません。

【第3段落】 「しかし、質的に等値された2つの商品は…」

上記の式は、リンネルの価値(だけ)を表現している。

価値表現の仕組み

- ①② リンネル = 上着 の式で、リンネルの価値だけが表現される。
- ③ リンネルが自分の「等価物」または自分と「交換されうるもの」としての上着に対して持つ関係によって、リンネルの価値が表現される。
- ④ 上着は、価値の存在形態として、価値物として、価値が目に見える物として現れる。

この段落の後半で、異なる2つの物質、酪酸とギ酸プロピルを、酪酸 = ギ酸プロピル と書いたら何を意味するかを、例として取り上げています。異なる物質ですから、これでは何が等しいか分かりません。この場合、物質の名前で分子式を表わしているとすると、等しいという意味が明らかになります。

リンネル = 上着 も同様に、何が等しいか表面には見えませんが、それらが価値を表わしているとすると意味のあるものになります。このようなリンネルと上着の関係は、リンネルの側から見ると、リンネルの価値が上着という使用価値で表わされている、あるいは、リンネルが自分の価値を上着という使用価値で表現していることを意味する、という訳です。

リンネルと上着の関係を上げるのは、例として適切か、という意見がありました。第3節Aの標題は「……偶然的な価値形態」ですから、どんな商品でも構わない訳で、分かりやすい例があったら紹介して下さい。

20エレのリンネル = 1着の上着

について、リンネルの持主が(相手が)上着だから交換する、商品が交換されたから等価置であるのか、等価値だから交換されるのか、等価値であることを判断する人がいる、といった質問・意見が出されました。リンネルの持主が上着を欲しており、20エレのリンネルの価値が1着の上着の価値と等しいと判断できればリンネルを上着と交換するでしょう。しかし、商品や、商品と商品の、目に見えない属性や関係を分析するにあたって、それらは商品所有者の欲望や意志や判断によって決定されるものではないので、商品所有者は捨象されます。

人々は社会的分業によって物を作りますが、私的に所有されるので、生産物を交換します。つまり商品となります。商品生産が一般化すると、人と物の関係、人と人の関係が商品に反映し、商品の属性、商品と商品の関係として表れますが、このとき生産者や所有者は捨象されているのです。

「資本論を読む会」便り

No. 8
2016.2.14

前回ご都合で欠席された方々も今回出席され、今年最初の「読む会」として良いスタートとなりました。

報告者のレジュメに従い、前回(相対的価値形態)の復習から始めましたが、著者自身が最も困難な箇所というだけあって、あーだろうか、こーだろうかと難渋し、あまり進めませんでした。

いろいろと難しいところが多いのですが、論理の運びと言うか、要するに何が言いたいのか、と考えつつ復習ノートを作りたいと思います。

◆復習ノート

編集人の復習ノート。すべての議論を紹介しているわけではありません。小見出し直後の「である」体の文章は原文やレジュメの引用や要約などです。便宜上、段落番号を本文の字下げごとに付けています(大月書店 全集版資本論による)。

第3節 価値形態または交換価値

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

二 価値表現の両極 相対的価値形態と等価形態

a 相対的価値形態の内実

【復習】レジュメの要約

- ・20エレのリンネル = 1着の上着 の意味。

(1) 商品交換のもっとも基本的な関係

資本主義社会では、生産物は商品として生産され、社会的に交換される。

この場合、一定量のある商品が一定量の別の商品と交換される。

すなわち、商品交換は使用価値の交換割合として表れる。

※ 捨象されているもの

資本の生産した商品であること。売買にまつわる信用。

商品所有者や購買者の思惑や欲望。貨幣。

実際に商品が交換され売買されている諸関係に付随するさまざまな諸問題、など。

(2) リンネル(20エレ)と上着(1着)が持つ価値が等しいという関係 (価値関係)

2つの使用価値が交換される → それらが同等であると結論できる。

すなわち、リンネル(20エレ)と上着(1着)の価値が等しいから交換可能。

・価値表現

価値が表わされ、見える、ということ。

価値関係の等式の内、価値表現が存在している。

その価値表現は、等式の上に直接には見えず、論理的に分析して初めて分かる。

この「a 相対的価値形態の内実」という節は、そのカラクリを説明をしている。

レジュメの「復習」部分はこのように要約できるかと思います。

報告者は、この「復習」に先立って、これまでの流れをまとめました。

- 商品は使用価値であると同時に価値でもある。
- 商品を生産する労働は、使用価値を生産する側面と価値を生産する側面の二重性を持つ(有用労働と抽象的人間労働)。
- 貨幣の謎を解くことが、第3節の課題である。
- 貨幣は特殊な商品であり、商品と商品が交換されるということの内に貨幣が潜んでいる。
- それが姿を表わすカラクリを明らかにする。

と、言われたと思います。

貨幣の謎を解くのですから、等式では、貨幣は捨象されているのです。

【第3段落】 「しかし、質的に等値された2つの商品は…」

20エレのリンネル = 1着の上着 は、リンネルの価値(だけ)を表現している。

価値表現の仕組み

リンネル = 上着 の式で、リンネルの価値だけが表現される。

上着は、価値の存在形態として、つまり価値が物として現れているものとして、つまり「価値物」として認められている。なぜなら、リンネルと同じものは上着ではなく上着の価値だけだからである。

リンネルが自分の「等価物」または自分と「交換されうるもの」としての上着に対して持つ関係によって、リンネルの価値が表現される。

酪酸=蟻酸プロピル という等式は、酪酸の分子式 $C_4H_8O_2$ を表わしている。両者は異なる物質であるが、等置されることによって、酪酸は分子式 $C_4H_8O_2$ を蟻酸プロピルに見たと言える。

この段落は前回もやったところです。

まず「価値物」が議論になりました。後に出てくる「価値体」と異なる概念で、価値物とは価値の目に見える形、という説明がありました。「価値を持っている物」という意味で、上着はその姿・形で価値を表しています。

次に、上着1着とか20エレのリンネルとかの量的割合は捨象されている云々といった議論がありましたが、メモ不十分で、よく思い出せません。すみません。

上着でリンネルの価値を表わすのは、「今の私の心は鉛だ」といった心の状態を物で表わすやり方と同じようだ、という発言がありました(例に出されたのは別の言い方だったと思います)。報告者も、そういう例えは初めてだが面白い、と感心していました。

酪酸と蟻酸プロピルの例について、C, H, O の数は等しいということを言っている、との確認がありました。両者の構成原子 C, H, O の数が等しいから、両者を等置することができます。この等式で酪酸は蟻酸プロピルに、蟻酸プロピルという物質をではなく、分子式つまり構成原子とその個数、を見ていることになります。ここでは蟻酸プロピルは、あれこれの酪

酸とは異なる諸性質を表わしているのではなく、分子式を表わしているものになっています。
なので、かの等式は、A(リンネル)の価値をB(上着)で表わす、という性質を持つわけです。

【第4段落】 「われわれが、価値としては商品は…」

価値関係の中に現れる価値性格

第3段落では、上着がリンネルとの価値関係において、価値物として妥当することによって、リンネルの価値が表現される(リンネルは相対的価値形態にある)ことが示された。

この段落で、本題である、その「内実」に入る。

商品の価値性格が価値関係のなかにどのように現象しているのかを解明している。

商品の価値性格

- ・社会的性格をもつ。(商品交換を通じて、その生産のために支出され、生産物に現れている具体的諸労働が、人間労働一般に還元されることによって。)
- ・価値を形成する労働が商品という物的対象に結晶、凝固したものである。

ここは、報告者の説明だけで終わりました。

【第5段落】 「たとえば上着が価値物としてリンネルに等置…」

回り道で織布労働を抽象的人間労働として認める

リンネル = 上着

の等式の基礎には

リンネルに含まれる労働=上着に含まれる労働

の関係がある。

織布労働、裁縫労働は異なる具体的労働であるが、「織布との等置は、裁縫を事実上、両方の労働のうち現実に等しいものに、人間労働という両方に共通な性格に、還元する。」

織布労働を眺めても抽象的人間労働を見つけ出すことはできない。

上着をリンネルに等置することは、上着が価値物としてリンネルに等置されることである。ゆえに、裁縫労働を織布労働に等置したことになる。

結果、裁縫労働は二つの異種労働の共通な質(等値)を体現していることになる。すなわち、裁縫労働を抽象的人間労働に還元することになる。(上着を作る労働は、人間労働を表わしている。)

第3段落で上着の使用価値によって価値を表わしていることが明らかになったが、それと同じ分析を、価値を作る労働の面から見たのである。(価値関係のなかにあっては、裁縫労働が抽象的人間労働を表わしているということである。)

そして、織布労働も価値を織るかぎり、裁縫労働と区別する特徴を持っていないこと、抽象的人間労働であることが、(この等置によって)明らかになる。

回り道とは、織布労働が、直接、自らの労働を抽象的人間労働に還元できないが、抽象的人間労働が対象化されている裁縫労働との等置によって、自らの価値を形成する労働を、すなわちそれが抽象的人間労働であることを表わすことを言う。

まず、「裁縫」と「裁縫労働」は同じ意味？ など、用語の意味の確認が行われました。

物体Aが天秤で物体Bと釣り合ったとき、 $A=B$ と等置することができます。このとき、AはBによってその重さ(質量)を表わすことができますが、それはBが重さを表わしている物体として現れたことを意味します。リンネルと上着の等置についても、これと同じ理屈だろうという意見が出されました。報告者も、そうだ、ということでした。

次に、回り道とはどういうことかが議論になりました。

リンネルを作る織布労働は(価値を形成するので)抽象的人間労働であるが、それを自分自身では表わせません。しかし他の商品、上着と等置されることによって、上着を作る裁縫労働が、織布労働と共通の質をもつ労働、抽象的人間労働として現れます。その結果、織布労働も抽象的人間労働であることを表わすことができる、こういうことではないでしょうか。

なお、過去に「回り道」論争というのがあったことが紹介されました。調べれば、われわれの理解に役立つかと思いますが、ここでは省略します。

ここで、「還元」と「回り道」は同じことかという質問がありました。「織布との等置は、裁縫を、事実上、両方の労働のうちの現実に等しいものに、人間労働という両方に共通な性格に、還元する」の「還元」です。裁縫労働はそれ自体は具体的有用労働ですが、織布との等置によって、抽象的人間労働と見なされている=還元されている、という事ではないでしょうか。なぜなら、上着は価値物として現れているのですから、その上着を作る労働は価値を形成する労働、つまり抽象的に人間労働となります。

それに対して、「回り道」は別のことのようにです。織布労働が抽象的人間労働であることは織布労働だけを見ても分からないが、裁縫労働(上着)との等置によって、裁縫労働が抽象的に人間労働に還元されるで、織布労働もまた抽象的人間労働であることが見えてくる、こう言うことだと思われまます。

あと、「整約」と「還元」とはどう違うのか、も、議論になりました。

【第6段落】 「しかし、リンネルの価値をなしている労働の…」

リンネルの価値表現

リンネルの価値形成労働の独自の性格は、自ら表現することはできないが、上着の裁縫労働を等置することによって、裁縫労働に抽象的人間労働の存在を見、自らを表現した。

さらに、リンネル価値を人間労働の凝固として表現するためには、それを、リンネルそのものとは物的に違っていると同時にリンネルと他の商品に共通な「対象性」として表現しなければならない。

リンネル = 上着

により、リンネルに上着を等置することにより、価値(人間労働の凝固)を表わした。

「流動状態にある人間の労働力」について質問がありましたが、労働中のことだと説明がありました。

(もう少し議論はありましたが、紙面の都合で割愛します。(編集人))

「資本論を読む会」便り

No. 9
2016.3.15

今回は、少し欠席された方もいましたが、前回ほどは難渋するところがなく(比較の問題ですが)、そのせいか議論も活発に行われました。

◆復習ノート

編集人の復習ノート。すべての議論を紹介しているわけではありません。小見出し直後の「である」体の文章は原文やレジユメの引用や要約などです。便宜上、段落番号を本文の字下げごとに付けています(大月書店 全集版資本論による)。

第3節 価値形態または交換価値

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

二 価値表現の両極 相対的価値形態と等価形態

a 相対的価値形態の内実

【価値表現の回り道】

資本論を読む会第8回(1月24日)では、「価値表現の回り道」が議論になりました。それを受けて今回のレジユメでは参考として、「価値表現の廻り道」についての「価値形態論と交換過程論」(久留間鮫造。p6~9)の説明が引用されていました(長いのでここには再録しません)。なお、この本は絶版になっているらしく入手困難なので、一部をコピーしてご希望の方にお送りしました。

議論の中で、「価値表現の回り道」は大事なところだからきっちり理解しておかなければならないという意見がありました。他方、大体のことが分かれば先に進む方が良いという意見もありました。この「読む会」には資本論は初めてという参加者も多いので、先に進むことになりました。「回り道」について、もう少しはっきりさせたい方は、いろいろ調べて頂いて後日「読む会」で報告していただければと思います。ご本人にも、他の参加者にも有益な事だと思います。

なお、「回り道」って何だったっけ、という方は、資本論の本文・レジユメ・「読む会」便りNo.8などをご覧になって下さい。「価値形態論と交換過程論」からの引用が分かりやすいかも知れません。

【第7段落】 「リンネルの価値関係の中で上着が…」

価値関係の中では、上着は現物形態で価値を表している。

リンネル=上着 の価値関係の中での上着は、リンネルの価値を上着の現物形態(使用価値)で価値を表している。価値関係の外では、上着は使用価値を表しているが、価値を表してはいない。上着は、価値関係の内部では、外に比べてより多くのことを表現している。

報告者は、リンネル=上着 という価値関係の中では、上着は、上着という使用価値のまま、その有用性だけでなく価値をも体現している、と説明されました。

金モールの服を着るとただの人間ではなく立派な将軍(?)でもあるぞ、と多くのことを表

現する例として取り上げられているのだろう、ということです。

助さん格さんが葵の紋所の入った印籠を掲げると、ただの隠居爺さんが「先の副将軍、水戸光圀公なるぞ」と、多くのことを表現するのと同じだ、という発言があり、参加者の笑いをさそいました。金モールよりも葵の紋所の入った印籠の方が、日本のわれわれには分かりやすいと思います。

では、遠山の金さんの桜吹雪はどうか、という話になりましたが、お白州の場以前に見せているから逆だなあ、ということになりました。

【第8段落】 「上着の生産では、実際に、裁縫という形態で、…」

リンネル=上着 の関係では上着は価値体としてのみ認められている。

上着は裁縫労働という具体的な労働によって作られ、それを通じて人間労働力一般が(上着に)支出される。しかしリンネルとの価値関係におかれた上着は、この具体的有用労働である裁縫労働そのものが人間労働力一般の支出形態として通用する。上着はただ単に人間労働力一般だけが支出されたものとして通用している。上着の具体的な物的姿態を形作ったのは具体的な有用労働である裁縫労働であるが、その裁縫労働が、ここでは(リンネルとの価値関係におかれている場合は)、一般の人間労働そのものの支出形態として通用している。だから、裁縫労働によって形作られた上着の具体的な姿態そのものが、価値そのものとして通用している。つまり上着は、その身体で価値を表すものである「価値体」として通用している。

リンネルにとって上着が(リンネルの)価値を表すためには、上着の姿そのものが価値そのものになっていないと価値が目に見える形で見えたことにはならない。

「価値物」も「価値体」もどちらも価値を「物」として目に見える形で表している。「価値物」は、リンネルと上着という二商品の価値関係から導き出されたものであるのに対して、「価値体」は、なぜ自然形態が価値という抽象的なものを表しているのかを、価値の概念(実体は抽象的人間労働)にまで遡ってその根拠が明らかにされたもの。

「価値物」は「価値」という二商品に内在する「本質」が二商品の直接的な関係によって「物」として現われたものだが、「価値体」はさらにそれを本質(価値の概念)との関連によって捉え返されたものであり、よってその(本質=価値概念の)現象形態として搦まれたものだと言える。

リンネル=上着 という価値関係の中で、上着は価値体であることの説明がありました。価値体という語は、上着は裁縫労働によって作られたものですが、価値関係の中では価値として現れていて、この面を言ったものということです。

また、似たような用語で、価値物がありますが、これと対比して

価値体…価値が具体化(物体化)したもの

価値物…価値の存在形態

という説明もありました。なかなか分かりにくいのですが、価値体とは「価値の権化」だと考えたら良いのではと思いました。権化とは、広辞苑によると、

①神仏が衆生済度のため、権(かり)に姿をかえてこの世に現れること。また、その権の姿。

権現。(例)今昔物語集13「世の人、聖人を権化の者とぞ言ひける」 実化。

②ある抽象的特質を具体化または類型化したもの。化身。(例)「悪の権化」

ということですから、②の用法です。

価値魂とは何かという質問がありましたが、上着の外見ではなく、目には見えないその中

身, すなわち価値をこう表現している, という説明がありました。

王と平民の例は, 次のような関係になっています。

A …… 平民 …… リンネル

B …… 王 …… 上着

王位が, Bという人間の姿で現れている, という訳です。どなたでしたか, 人間, 余計のものを付けないと, 認められないな, とおっしゃっていました。

【第9段落】 「こうして, 上着がリンネルの等価物となっている…」

一商品の価値が、他の商品の使用価値で表される。

リンネル=上着 上着は等価物であり、上着形態は価値形態である。

商品リンネルの価値は商品上着の身体で表されている。これは、一つの商品の価値を他の商品の使用価値で表されることを意味している。リンネルは上着と使用価値は異なるが、価値としては、「上着に等しいもの」であり、上着そのものとして見えるということである。だから、リンネルは自分の現物形態とは別に、価値が実際に見える物的な姿をとって現れる価値形態を受け取ったことが確認できる。

等価におかれる上着が、新たな形態規定(その自然形態が直接価値を表す)を受けることでもあったといえる(第7・8段落)。

キリスト教徒=神の子羊(キリスト) の例え

キリスト教徒がキリストを信じ敬うのは、自分のなかに存在している羊のような従順で疑うことを知らない性質をただキリストのなかに写して見ている(同一性)、ということではないか。

リンネル=上着 という価値関係によって、リンネルの価値が上着という使用価値で表わされる(等価物)、リンネルから見ると価値が上着の姿で見える, ということでしょう。

ここで報告者から、「回り道」について説明がありました。

これまでは、リンネルと上着が例として取り上げられ説明されてきましたが、「一商品の価値が他の商品の使用価値で表わされるのである。」という文で、一般化された結論が述べられている, という指摘がありました。

あと、神の小羊の例も、なかなか分かりづらいところです。西欧諸国ではキリスト教が普及しているので、こういう例えが分かりやすいかもしれませんが、日本では、キリスト教徒ではない者にとっては難解です。また、仏教で例えたらどうなるか, とか, いろいろな議論がありました。

【第10段落】 「要するに, さきに商品価値の分析が…」

リンネルが商品語で語っていること

リンネルが上着を等置関係(価値関係)に置くやいなや語り始める、《商品語》で語られている二つの内容は、「商品の価値性格」の二つの内容(第4段落)である。

- 1) 抽象的人間労働という「価値を形成する労働の独自な性格」
- 2) 「人間労働の凝固体」としての価値の「対象的性格」

つまり、リンネルが自身の価値性格を語っていることでもある。(第5段落、第6段落)

価値の分析がわれわれに語ったこと (リンネルの《思い》)		リンネルが語る《商品語》	
労働は人間労働という抽象的屬性においてリンネル自身の価値を形成するということ	を言う ために	上着がリンネルに等しいものとして通用する限り、従って価値である限り、上着はリンネルと同じ労働から成りたっている	と言う
リンネルの高尚な価値対象性は糊で ごわごわしたリンネルの身体とは異なっているということ		価値が上着に見え、したがって、リンネル自身も価値物としては上着と瓜二つである	

商品語とは、商品世界の内部におけるリンネル自身の語りである、との説明がありました。その「語り」とは、レジメにうまくまとめられています(上記、要約を参照)。レジメの表が分かりやすいとの声もありました。

また、この段落は、商品そのものの関係から貨幣化が生まれてくること、商品の貨幣化を暗示しているとの意見がありました。

報告(レジメ)の「二つの内容」とは何か、との質問がありましたが、人間労働と価値であると説明されました。

商品語の方言について、ドイツ語 Wertsein は名詞。valere, valer, valoir はイタリア語、スペイン語、フランス語で、動詞であることに注意すべきという指摘がありました。商品語とは、リンネルが上着と交換可能である、リンネル=上着 という価値関係を結ぶ、という事実のことを指していると思われませんが、これを人間の言葉(方言)で言うと、「リンネルは、値する、上着に。」となります。

フランス語 Paris vaut bien une messe!

ドイツ語 Paris ist eine Messe wert!

なので、ドイツ語は ist と wert とに分かれ、ist には値するという意味はなくて、あまり良くない、ということのようです。

【第11段落】 「こうして、価値関係の媒介によって、商品Bの…」

相対的価値形態の内実のまとめ

価値関係、つまり商品自身が商品世界の中で主体的に取り結ぶ関係、すなわち 商品A=商品B の関係において、「商品Bの現物形態は、商品Aの価値形態になる。」

A=B においては、Aの価値が、Bの自然形(現物形態)で表わされています。このBが価値体ですが、人間労働が物質化されたもの、と言えます。

価値鏡の鏡とはどういう意味か、との質問がありました。A=BのBが鏡で、AがBを見るとそこにはAの価値が写っている、というわけです。商品Bは価値表現の材料になっています。

第10段落で、「要するに、先に商品価値の分析がわれわれに語ったいっさいのこと…」というのは、どこでの話か、という質問がありました。この章の第1節、第2節です。

(もう少し議論はありましたが、メモが不十分だったり、紙面の都合で省略しています。(編集人))

「資本論を読む会」便り

No. 10
2016.4.15

今回はいつもと違って土曜日でしたので(日曜日は部屋が取れませんでした), 都合のつかなかった方もおられ, 申し訳ありませんでした。

◆復習ノート

編集人の復習ノート。すべての議論を紹介しているわけではありません。小見出し直後のゴシック体・丸ゴシック体のはレジュメの引用や要約などです。便宜上、段落番号を本文の字下げごとに付けています(大月書店 全集版資本論による)。

第3節 価値形態または交換価値

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

二 価値表現の両極 相対的価値形態と等価形態

b 相対的価値形態の量的規定性

前回の、「a 相対的価値形態の内実」(7)(8)(9)(10)(11)段落の復習をしてから、今回のところに進みました。

【第1段落】 「その価値が表現されるべき商品は、…」

価値形態における価値量の表現

これまで、相対的価値形態の質的側面を分析して、その内実を明らかにすることができた。しかし相対的価値形態は、同時に、量的規定性を持ったものでもあり、今度はこれを分析する。

価値体とは等価物のことなのかと質問がありました。「…、一定量の価値体または等価物、…」という記述があるからです。

価値体とは、目に見える使用価値が、抽象的な価値を表わしている使用価値です。それに対して、等価物とは、ある商品と(価値が)等しいとされている(交換可能である)商品のことです。つまり2商品の関係の中での謂いです。20エレのリンネル=1着の上着 という関係の中で、上着はリンネルの等価物という役割を担うのですが、リンネルの価値を上着の使用価値で表現しているのです。ここでは上着は価値体として存在しています。こういう事情で「…価値体または等価物…」といった表現になるのでしょうか。

それはともかく、20エレのリンネル=1着の上着 という関係は量的関係であることは明らかです。ただし、量には、使用価値の量と、価値の量(その実体は抽象的人間労働の量、つまり生産に必要な平均的労働時間)の2種類があります。

【第2段落】 「『20エレのリンネル=1着の上着 または …』

商品の価値量の変動と価値形態

「20エレのリンネル=1着の上着」という等式は、2つの商品の生産には同じ量の抽象的人間労働が凝

固していることが前提されている。

しかし、各商品の生産に必要な労働時間は、織布労働(リンネルの生産)または裁縫労働(上着)の生産力が変われば変化する。この変化が価値の大きさの相対的表現にどのように影響するかを研究する。

以下の段落で何をしようとしているかを説明しています。

労働時間について、それは有用労働なのか、抽象的人間労働なのか、という質問がありました(と思います)。報告者からは、両方、との回答がありましたが、抽象的人間労働と解して良いのではないかと思います。

【第3段落】 「Ⅰ リンネルの価値は変動するが、上着価値は…」

Ⅰ リンネルの価値量は変動、上着価値は不変の場合

- ①リンネルの生産に必要な労働量が2倍になった場合
20エルのリンネル=2着の上着 となる。
- ②リンネルの生産に必要な労働量が $\frac{1}{2}$ 倍になった場合
20エルのリンネル= $\frac{1}{2}$ の上着 となる。

つまり、商品Aの相対的価値(商品Bで表わされている)は、商品Bの価値が不変でも、商品Aの価値変動に正比例して、上昇あるいは下落する。

①の場合、リンネルの価値が2倍になったのだから、その価値量を表わす上着は2倍すなわち2着必要だ、ということです。②も同様です。

この段落の主旨とは関係ないですが、相対的価値の相対的とはどういうことか、という質問が(編集人から)ありました。ある商品の価値を表わすのに別の商品との比較であらわすことだというのが報告者の回答です。質問者もそのことは知った上での質問です。例えば、原子1個の質量を表わすのに、kgを使うと数字が小さくなりすぎるので、水素原子1個の質量を1(厳密には質量数12の炭素原子の $\frac{1}{12}$ の質量を1)として他の原子の質量を表わし、これを相対質量と言います。しかしkgで表わした質量を”絶対質量”などとは言いません。基準とする物体が国際キログラム原器に変わるだけで、質量の表わし方はやはり相対的です。そういう訳で相対質量という言い方に違和感があり、相対的価値の相対的の意味を質問したのです。

ところで、等価物として後に金が登場します。質量における国際キログラム原器に相当するのだと思いますが、原器の質量は変化しないのに対し、金の価値は変動します。この点が価値の表現をややこしくするように思います。

【第4段落】 「Ⅱ リンネル価値は不変のままであるが、…」

Ⅱ リンネル価値は不変、上着価値が変動する場合

- ①上着の生産に必要な労働量が2倍になった場合
20エルのリンネル= $\frac{1}{2}$ 着の上着 となる。
- ②上着の生産に必要な労働量が $\frac{1}{2}$ 倍になった場合
20エルのリンネル=2着の上着 となる。

つまり、商品Aの相対的価値(商品Bで表わされている)は、商品Aの価値が不変でも、商品Bの価値変動に反比例して、下落あるいは上昇する。

ここでは特に議論はありませんでした。

【第5段落】 「I と II に属するいろいろな場合を比べてみれば、…」

I, II のまとめ

- ① 20エレのリンネル=2着の上着 となるのは、
リンネルの価値が2倍になるか、上着の価値が $\frac{1}{2}$ 倍になったとき。
 - ② 20エレのリンネル= $\frac{1}{2}$ 着の上着 となるのは、
リンネルの価値が $\frac{1}{2}$ 倍になるか、上着の価値が2倍になったとき。
- つまり、相対的価値の量的変動は、正反対の2つの原因から生じる。

この段落は、等式で結ばれた2商品のうち一方の価値だけが変動する場合か、という質問がありました。I, II のまとめですからそうなります。

価値変動を取り上げることについて、インフレ現象を説明する伏線なのかという質問が出ましたが、インフレとは別の話であるとの説明がありました。インフレは紙幣流通の問題で、第3章第2節 流通手段 の c のところで出てきます(インフレという語は出てきませんが)。

【第6段落】 「III リンネルと上着の生産に必要な労働量が、…」

III リンネルと上着の価値が同時に同じ割合で変動する場合

この場合、20エレのリンネル=1着の上着 という関係は変わらず、相対的価値の表現は不変である。各商品の価値変動は、別の価値変動のない商品との比較で分かる。

同じ労働時間でこれまでより多くのリンネル、例えば2倍の量を生産できるようになった場合、リンネルの価値は半分に減少します。この半分になるというのは、同じ使用価値量、例えば20エレで比べての話です。上着についても同様です。

生産力が大きくなってより多く生産できるようになったのに、価値が減少するという点について、何かしっくりしないものを感じられた方もおられたようです。増加したのは使用価値であり、価値と使用価値の区別の曖昧さがしっくり来ない原因かも知れません。

ここで、為替変動の問題が一頻り話題になりました。例えば、1ドル100円であった国際為替相場が1ドル110円になった場合、これは円安です。100円が110円になったのに円「安」なのです。金の価値、金の価格、為替相場の仕組みなどにも話は及びましたが、われわれが今学んでいる価値変動による相対的価値表現の変化とは別のテーマです。為替変動が持ち出されたのは、数値(円)が大きくなっているのに安くなったという点が、生産力が大きくなったのに価値が減少するという点と似ているからではないでしょうか。為替変動のことは今は考慮しなくて良いと思います。増加したのは何か、減少したのは何かをはっきりさせれば、しっくり来るかと思えます。

なお、為替相場については資本論第3巻で扱われています。

【第7段落】 「IV リンネルと上着とのそれぞれの生産に必要な労働時間、…」

IV リンネルおよび上着の生産に必要な労働時間の様々な変化

- (1) 同時に同じ方向へ変化するが、変化の割合が異なる場合
例:リンネルの価値が $\frac{1}{2}$ に、上着の価値が $\frac{1}{4}$ に変化した場合
20エレのリンネル=2着の上着 となる。
- (2) 変化の方向が逆のばあいもある。
- (3) 変化の割合や方向によって、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ を応用すれば分かる。

2商品の価値がさまざまな方向にさまざまな割合で変化する場合、つまり一般的な場合はどうなるか、というのが、この段落の課題です。

ここで「方向」とは何かという質問がありました。これは北向きとか東向きとか言う意味の方向ではなく、価値が増加するのか減少するのかということ、方向という語で表わしています。増加と減少は逆方向の変化、ということです。

レジュメでは(1)の例としてあげられた数値は少し複雑でしたので、議論の中で分かりやすい数値に訂正されました。上の要約は、訂正されたものです。因みに、20エレのリンネルの価値が a 倍、1着の上着の価値が b 倍になったとすると、価値関係は

$$20\text{エレのリンネル} = \frac{a}{b} \text{着の上着}$$

となります。 a 、 b はそれぞれリンネルと上着の価値変化の割合で、増加ならば1より大、不変ならば1、減少ならば1未満です。

【第8段落】 「こういうわけで、価値量の現実の変動は、…」

価値量の変動は、相対的表現、あるいは相対的価値の大きさに、忠実に反映されることはない。

- (1) 1商品の相対的価値は、その商品の価値が不変でも、変動しうる。
- (2) 1商品の相対的価値は、その商品の価値が変動しても、不変のままであり得る。
- (3) 1商品の価値とその相対的価値とが同時に変動しても、それらの変動が一致するとは限らない。

相対的価値表現が同じでも各商品の価値変動はいろいろある、価値量の変化をきちんと見とおかなければならない、という指摘がありました。相対的価値表現だけを見ても、価値量の変化は分からないということです。

段落の1～2行目の文がポイントだと思われまます。

【第8段落の注20】

ここでは、商品の価値の相対的表現が、その価値の変化を必ずしも忠実に表わさないということから、だから商品の価値がそれに体现された労働の量によって規定されるというリカードの価値論の崩壊を主張するプロードバーストの誤りを説明している。

この注の意味はレジュメのとおりですが、文章の意味がつかみにくいところです。編集人は「内容を整理してみます」と発言しましたが、この「便り」では紙数がつきましたので、次の例会で資料として出したいと思います。(ホント?)

「資本論を読む会」便り

No. 11
2016.5.16

第11回は日曜日の開催でしたが、年度初めとて休日出勤を余儀なくされた方もおられました。他方、今回から新しく男性の方が、参加されました。現在の報告者の知り合いの方で、本会については昨年からおられたそうですが、前触れなしの参加に報告者は「びっくりポン」でした。「読む会」の議論がますます活発になりそうです。

◆これまでの要約

新しい参加者のために、司会者が急遽これまでの要約を行ない、報告者が補足しました。今回のレジュメに、「3 等価形態」に進む準備としてこれまでの「商品分析」の内容整理がありました。それを簡単に要約する次のようになるでしょうか。

第1章第1節

価値方程式(=価値等式=価値関係) 20エレのリンネル=1着の上着 を所与のものとして分析し、2商品に共通なものを解明した。

商品の2つの要因は、使用価値と価値である。

価値の実体は抽象的人間労働、価値の量は抽象的人間労働の量つまり労働時間である。

第2節

商品に含まれている労働の2面性を分析した。

使用価値を形成する具体的有用労働と、価値を形成する抽象的人間労働の2つ。

第3節

商品の価値表現の仕組みを解明する。

◆復習ノート

編集人の復習ノート。すべての議論を紹介しているわけではなく、内容も編集人の理解(誤解?)が入っています。小見出し直後の丸ゴシック体はレジュメや本文の引用や要約などです。各段落の本文は直接「資本論」に当たって下さい。便宜上、段落番号を本文の字下げごとに付けています(大月書店 全集版資本論による)。

第3節 価値形態または交換価値

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

三 等価形態

【第1段落】 「すでに見たように、1商品A(リンネル)は、…」

等価形態は直接交換される形態

リンネル = 上着

という等式では、リンネルの価値が上着の使用価値で表現されている。

つまり、リンネルは、上着を、等価物(等価形態)にしている。

等価形態にある上着、「上着の自然形態(物的形態) そのものが価値を表わしている」

- ・「直接交換」されるとは

すべての商品は価値としては交換可能なものであるが、「直接」にではない。商品の「

直接」的な存在はその使用価値だから。

等価形態にある商品(上着)は、それ(上着)によって価値を表現する商品(リンネル)に対しては、使用価値そのものが価値の形態になっているから、その商品(上着)は「直接」に交換可能である。

当「読む会」は毎回午後2時から4時までの約2時間、行なっています。今回、この段落だけで約1時間、全体の半分をこの段落の検討に費やしました。それだけこの段落は難解でした。

報告はまず上の等式から始まりした。

リンネル = 上着

この式では、リンネルは相対的価値形態にある。

何が等しいかという、それは価値である。

価値は、労働生産物が交換によって必要とする人の手に渡る、という仕組みから生まれる商品(労働生産物)の属性である。

価値形態とは、価値の、目に見える形ということ。

リンネルの価値は、上着の使用価値で表わす(表わされる)。

というようなことだったと思います。

段落後半の、「一商品の等価形態は、その商品の他の商品との直接的交換可能性の形態である。」は、どんな商品とも交換できる貨幣の性質(お金があればどんなものでも買える)と関連しているということでした。

最初、リンネルとは？ という質問がありました。その方の持つておられるテキストでは亜麻布と訳されていたようです。要するに布地です。

これは簡単で良かったのですが、等価物(等価形態にある商品)の「直接的交換可能性」の意味について、議論が長時間続きました。

まず「直接」の意味が議論されました。商品は価値としては交換可能だが、商品の直接的な存在はその使用価値だから、直接には交換可能ではない。上着が等価形態に置かれることで、価値が上着の使用価値という形で現れる。だから「直接」に交換できる、という理屈のようです。交換の意味を吟味したり、第6段落で出てくる天秤の例を持ち出しての説明もありました。話は分かるけれど何かスッキリしない感じが残りました(編集人だけかも知れませんが)。

資本論辞典を見てみると、「直接的交換可能性」という項目がありましたので、ここに引用して、参考資料として供したいと思います。

【直接的交換可能性】 *unmittelbare Austauschbarkeit* (資本論辞典 p350)

商品は、商品であるかぎりどの商品も無差別な人間労働の体化物として同一のものであり、したがって他のいずれの商品とも置きかえられうるはずのものである。商品Aが価値であるということは、このように商品Aが無差別な人間労働の体化物として他の任意の商品と置きかえられうるということにほかならない。

'価値としては、すべての商品は、同一の単位のすなわち人間労働の、等しい資格をもちたがいに置きかえうる、すなわち交換されうる、諸表現である'(K I, 1. Aufl., 768)。

だが商品のあるがままの自然形態は、つまり直接的な形態は、使用価値の形態であって価値の形態ではない。商品Aたとえばリンネルの価値は、他の商品たとえば上衣と交換関係に立つことによってはじめて表示される。すなわち、リンネルは、自分に上衣を等置して、上衣は

自分と同一のものであるとすることによって、上衣に両者に共通な無差別な人間労働の体化物、つまり価値物という形態規定を与え、そして自分にかかる上衣に等しいのだとして、自分が無差別な人間労働の体化物であることを語るのである。

'リンネルは、使用価値であるかぎり、一つの独立的な物である。これに反してリンネルの価値は、他の商品たとえば上衣にたいする関係においてのみ、すなわち、上衣という商品種類がリンネルに質的に等置され、したがって一定分量においてリンネルと等しい資格をもち、リンネルに置きかわり、リンネルと交換されうるところの関係においてのみ、あらわれる。それゆえ価値は、交換価値としてのその表示によってのみ、使用価値から区別された、それ自身の形態を受けとるのである'(K I, 1. Aufl., 16~17)。

'諸商品は、それらが直接的なものであるかぎり、直接的には交換されえない。つまり、諸商品は相互にたいして直接的な交換可能性の形態をもたない、すなわちそれらの社会的に妥当な形態は、一つの媒介された形態である'(K I, 1. Aufl., 30)。

このようにしてリンネルは上衣の自然形態を自分の価値形態としているのであるが、この関係の内部において上衣の自然形態は価値物たる資格を与えられているのであるから、上衣は直接的に、つまりその自然形態のまま、他のいずれの商品とも一といってもこの関係の内部における商品、つまりリンネルと一自由に交換しうるといって資格を与えられていることになる。すなわち、直接的交換可能性を与えられている。そして上衣はリンネルとのこの等置関係の内部においては、かかる資格においてのみ立っているのである。このばあい、上衣は等価物として機能し、等価形態にあるのであるが、このように、ある商品が等価形態にあるということは、その商品が他の商品と直接的交換可能性の形態にある、そういう形態を与えられている、ということにほかならない。

'一商品A(リンネル)は、その価値を相異なる種類の一商品B(上衣)の使用価値で表現することにより、後者そのものに一つの独自の価値形態、すなわち等価物たる形態を押しつける。リンネル商品は、自分にたいして上衣が、その物体形態と異なる一つの価値形態をとることなしに、等しいものとして置かれることによって、それ自身の価値存在を現出させる。だからリンネルは事実、上衣は直接的にリンネルと交換されうるものだけということによって、それ自身の価値存在を表現するのである。したがって、一商品(上衣)の等価形態とは、その商品の、他の商品との直接的交換可能性の形態である'(K I-60; 青木 1-146; 岩波1-109)。

'一つの商品体が他の商品と直接的に交換されうるのは、その商品体の直接的な形態、すなわちそれ自身の物体的または自然的形態が、他の商品にたいして、価値を表象する、つまり価値姿態として意義をもつ、かぎりにおいてである。かかる属性をば、上衣はリンネルの上衣にたいする価値関係のなかでもつ。そうでなければ、リンネルの価値は上衣という物では表現されえないであろう。だから、総じて一商品が等価形態をもつということは、価値表現におけるその商品の位置によって、それ自身の自然形態が他の商品にとって価値形態としての意義をもつ、または、その商品が他の商品との直接的交換可能性の形態をもつ、ということにほかならない'(K I. 1. Aufl., 768)。

ある商品が一般的等価形態にあることは、その商品が他のすべての商品との直接的交換可能性をもっていることであるが、ある一商品種類がかかる

'一般的な直接的交換可能性 (allgemeine unmittelbare Austauschbarkeit), の形態をもつのは、他のすべての商品がかかる形態をとらない、つまり'非直接的交換可能性(nicht unmittelbare Austauschbarkeit), の形態に立つからであり、またそのかぎりにおいてである (K I-73~74; 青木 1-166; 岩波1-132)。

貨幣商品においては、この一般的な直接的交換可能性をもつことが、その商品の自然形態と窮極的に結びついている、一

'直接的な一般的交換可能性(unmittelbare allgemeine Austauschbarkeit) の形態または一般的な等価形態が、いまや社会的慣習により、金という商品の特殊な自然形態と窮極的に癒着して

いる'(K I- 75; 青木1-169; 岩波1-135~136).

[原典] K I 第1篇 第1章 第3節 A3 (三宅義夫)

【第2段落】 「ある1つの商品種類,たとえば上着が, …」

等価形態の量的規定について

上着が等価形態にあるといっても, (価値の) 量的(被) 規定性はない。

・上着の価値量

上着の価値量は, 価値形態によって決まるのではない。

上着の価値量は, その生産に必要な労働時間によって決まっている。

・上着は自分自身の価値(量)を表現していない

上着が等価形態にある場合, 上着自身の価値量は表現されていない。

この場合, リンネルの価値量を表現している。上着はその表現の材料となっている。

議論の中で, 価値と使用価値の区別を確認しました。

価値は抽象的人間労働が凝固したもので, 価値量はその労働時間によって決まります。したがって, 上着の価値量が価値形態によって規定されません。

また, 等価形態にある上着の価値量は, 価値等式によって表現されません。

【第3段落】 「たとえば, 40エレのリンネルは「値する」 — なにに? …」

等価形態は量的な価値規定を含んでいない

40エレのリンネル=2着の上着

という等式は, 40エレのリンネルの価値量は, 2着の上着に値することを表わしている。

つまり, 2着の上着(使用価値量)で, リンネルの価値量を表現している。

しかし, 上着自身の価値量を表現してはいない(できない)。

等価形態にある商品(上着)は, 他の商品(リンネル)の価値量を表現しているが, 自分は使用価値の量の形態を持っているだけである。

このことが, ベーリらに, 価値表現の中に単なる量的な関係を見る誤りに陥らせた。

価値体とは使用価値で価値を表現したもの, という説明がありました。価値物, 等価物など似たような語があるので, やっかいです。

価値等式の中で, 等価物は使用価値の一定量という量の形態を持っているということです。

ベーリらの誤りについては議論しませんでした, 「単なる量的な関係」の「量」は, 価値量の意味かと思います。

【第4段落】 「等価形態の考察にさいして目につく第1の特色は, …」

等価形態の特色

第1の特色 使用価値が, その反対物の, 価値の現象形態になっている。

この段落と, 第5段落以下で, 第1の特色を説明しています。

第2の特色は, 第9段落以降で説明されます。

「資本論を読む会」便り

No. 12
2016.6.10

前回同様、今回も新しく参加された方がいらっしゃいました。常連の参加者のお知り合いだそうです。前回新参加の方は今回はご欠席。当「読む会」を始めて既に1年経っていますから、資本論を初めて読むという方には、途中からの参加は難しいのかも知れません。できる限りフォローしますので、是非とも引き続いて参加して頂ければと思います。一人でも多くの人に資本論を知って頂きたいと思っています。

◆第12回の内容

編集人の復習ノートです。すべての議論を紹介しているわけではなく、編集人はこう理解した、ということです。誤解もあるかも知れません。小見出し直後の丸ゴシック体は、主に段落の内容をレジュメを要約して紹介しています。段落の本文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落初めの数語と、段落番号(本文の字下げごとにカウント)を付けています(大月書店 全集版資本論による)。

第3節 価値形態または交換価値

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

三 等価形態

新参加の方がいらっしゃいましたので、最初にこれまでのまとめをしました。報告者は、特に今やっている第3節について詳しく説明した後、今回のところに進みました。

【第4段落】 「等価形態の考察にさいして目につく第1の特色は、…」

等価形態の特色 使用価値が価値の現象形態になる

第1の特色 使用価値が、その反対物の、価値の現象形態になっている。

この段落から第8段落で、第1の特色を説明しています。

第2の特色は、第9段落以降で説明されます。

【第5段落】 「商品の現物形態が価値形態になるのである。…」

商品の現物形態が価値形態になる

これは、第4段落の「使用価値がその反対物の、価値の現象形態になる」の言い換え。

上着の使用価値がリンネルの価値の現象形態であるという役割を持たされるということ。

上着のこの役割は、リンネルとの価値関係の中に上着が置かれる限りでのこと。

商品は自分自身で自分の価値を表現することができません。しかし、

20エレのリンネル=1着の上着

という関係の中では、リンネルは、上着の使用価値(現物形態)によって、リンネルの価値を表現しています(価値形態になっている)。

【第6段落】 「このことを分かりやすくするのは、…」

天秤による重さの表現

使用価値が、価値の表現になっていることを分かりやすくする、棒砂糖の重さを表現する例。

- ①棒砂糖には重さがある。
棒砂糖の重量は目に見えない。
- ②鉄片にも重さがある。
鉄片の重量も目に見えない。
重量が確定されている鉄片を用意する。
- ③棒砂糖と鉄片を天秤に乗せ、釣り合わせる。

例えば、

1袋の棒砂糖 = 5個の鉄片

となる。

この関係の中では、鉄片5個は重さだけを表わしている。

- ④鉄片は、棒砂糖に対して、重さの現象形態という役割を果たしている。
鉄片が棒砂糖の重さを表現できるのは、棒砂糖と鉄片の重量関係の中だけである。
価値表現では、上着はリンネルに対して、価値だけを代表している。

ここでは、

1袋の棒砂糖=5個の鉄片

と

20エレのリンネル=1着の上着

とが比べられています。

物の重さを表わすには、別の物(この例では鉄片)の分量で表わします。リンネルの価値が上着の分量で表わされるのも、同じ理屈だ、ということでしょう。

鉄片は「あらかじめ重量が確定されている」必要がありますが、重量が全て等しい鉄片を用意しておくことだと思います。天秤を使って、重量が等しい鉄片を必要な数だけ用意することができます。

議論の中で、キログラム原器に言及がありました。これを基に分銅が作られ重量の標準になっています。物の重量を計る場合、原器も分銅も、その材質が何であっても、重量そのものとして現れ、扱われているということです。

20エレのリンネル=1着の上着

が前提されていて、この中で20エレのリンネルの価値がどう表現されているかが、問題にされている。ここでは労働時間によって価値量を見ることはできない、という指摘がありました。

【第7段落】 「とはいえ、類似はここまでである。…」

自然的属性と社会的属性

価値表現と重量表現の類似はここまでで、価値と重さは次の点で本質的に異なる。
重さは、物体の自然的属性である、のに対し、
価値は、商品の超自然的(=社会的)属性である。

価値は商品の社会的属性であって、見たりさわったりしても分からない、ということです。それに対し、物体の重さは、見たりさわったり、つまり自然的関係の中に置く(押してみたり、引いてみたり。)ことで、重さがあることが分かります。商品を自然的関係の中に置いても、それに価値があることは分かりません。

【第8段落】 「ある一つの商品、たとえばリンネルの相対的価値形態は、…」

社会的なものが自然的なものに見える

相対的価値形態にある商品(リンネル)

別の商品(上着)によってその価値を表わしている状態。

よって、価値の背後に、商品と商品の社会的関係が潜んでいることが暗示される。

等価形態にある商品(上着)

商品(上着)の自然形態そのものが他の商品(リンネル)の価値を表わしている。

よって、商品(上着)自身が生まれながらにして価値の形態を持っているように見える。

- ・上着が直接価値を表わすのはリンネルとの価値関係の中でのみ認められる。
- ・上着が表わしている価値は、リンネルの価値。
- ・上着の自然形態が価値を表わしているので、価値が上着の自然属性のように見える。

一般に、物の属性は、

他の物との関係から生じるのではなく、

他の物との関係の中で確認されるだけである。

そのため、上着が価値を表わすことが、

リンネルとの価値関係を離れて、

上着自身の自然属性として見える、

ここに、等価形態の謎的性格(不可解さ)が見える。

等価形態が完成された形態=貨幣形態となって、金銀の神秘的な性格として現れる。

(金はなぜ価値があるのか。金はどんな商品とでも交換できるのはなぜか。)

20エルのリンネル=1着の上着 という単純な価値形態の内に、等価形態の謎を解く鍵がある。

資本論入門(河上肇)からの引用

「金は、これを等価物としてあらゆる商品がそれに働きかけるゆえに、貨幣となるのであるが、外見的にはそれが逆に金は貨幣であるがゆえに、一般的等価物に立つが如くにみえるのである。」

上着が生まれながらにして価値であるように見えることについて、報告者から、全ての商品が上着を等価形態に置くなら、確かに(明らかに)そう見える、と追加して説明がありました。したがって、全ての商品が金を等価形態に置くようになると、金は生まれながらにして価値であるように見える、という訳です。しかし、そのように見える仕組みは、既に、単純な価値

形態 20エレのリンネル=1着の上着 の内にある、ということです。そして何故そう見えるかということが、この段落で明らかにされました。

この段落の2番目の文(第2センテンス)「等価形態については逆である。」について質問が出されました。

一つ前の文では、リンネルの相対的価値形態の表現の背後に、価値は社会的関係と関連していること見ることができる、としています。他方、次の第3センテンスでは、等価形態にある商品は、あるがままの姿で価値を表現しているのだから、生まれながらに価値形態を持っていると見える、と言っています。つまり、社会的関係があるようには見えないということで、相対的価値形態とは「逆である」という訳です。

「貨幣の謎」について議論がありました。金は生まれながらにして貨幣つまり一般的等価物であるように見えるのは何故か、ということだったと思います。なお、一般的等価物というのは、第3節 Cのところに出てきます。簡単に言うと、あらゆる商品が、それを等価形態に置くその商品、つまりあらゆる商品がその価値を表現するのに用いる一定の商品、ということになるのでしょうか。

等価形態にある上着は、上着の価値を表わしているのか、つまり「自分で自分の価値を表わしている」のか、という疑問が出されたかと思います。しかし等価物である上着は、リンネルとの等置関係の中でリンネルの価値を表わしているのだから、全てのものの価値を表わすのではないし、自分自身の価値を表わしているでもない、という指摘がありました。

「等価」というのは、上着の物的姿(使用価値)が価値そのものとして現れている(リンネルから見ると)、使用価値が価値になっている、そういう意味だと思います。

他にもいろいろ議論がありましたが、最後にKさんから、注21の説明がありました。

王Aが王であるのは、臣下Bが自ら臣下として振る舞うことで、Aを王として扱うからである。にも関わらず、BはAが王だから自分は臣下として振る舞っている、と思っている。ということだったと思います。

BがAに対して臣下として振る舞うことをやめる時=王朝の交代や政変、だと思っています。大化の改新のきっかけとなった乙巳の変を思い出しました。

※ 今回新しく参加された方から、読んだら一応納得できたのに、会では同じことを何度も議論しているように思える、という感想を頂きました。参加者全員が一応納得できてから次に進む、を基本にしているのだから、そういうことになったかと思います。しかし、司会が議論を良く整理して、効率よく進める必要もあると思います。

「資本論を読む会」便り

No. 13
2016.7.10

今回も新しく参加された方がいらっしゃいました。昔読んだことがあるようですが、今また、ちゃんと理解したいと思うようになり、Webで検索して、当「読む会」を知ったそうです。ホームページからこれまでの「読む会」便りを落として印刷し、今回からの途中参加に備えられたそうです。持参の「資本論」にたくさんの付箋紙が貼られていたのが印象的でした。

◆第13回の内容

編集人の復習ノートです。すべての議論を紹介しているわけではなく、編集人はこう理解した、ということです。誤解もあるかも知れません。小見出し直後の丸ゴシック体は、主に段落の内容やレジュメを要約して紹介しています。段落の本文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落初めの数語と、段落番号(本文の字下げごとにカウント)を付けています(大月書店 全集版資本論による)。

第3節 価値形態または交換価値

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

三 等価形態

今回も、報告者が最初にこれまでの簡単なまとめを行ない、今回のところに進みました。

「三 等価形態」の課題

段落の説明に先立って、この「三 等価形態」の課題は等価形態の謎を明らかにすることだと、報告者による再確認がありました。それは、貨幣の謎の根源となっているからです。レジュメの冒頭部分を次に示しておきます。

相対的価値形態にあるリンネルは、リンネルの価値を自分自身の体(自然形態)で表わすことができないので、別の商品上着を等価形態に置くことで、その価値を表現する。だから、商品と商品の価値関係において社会的関係が潜んでいることが分かる。しかし、等価形態の上着は、上着の自然形態そのもので価値(社会的関係)を表わしている。そのためリンネルとの関係が見えにくく、リンネルの価値を表わしていることが見えなくなることによって、上着自身が生まれながらにして(属性として)価値の形態を持っているかに見えるのである。この等価形態の不可解さが、貨幣の謎の根源となる(金は生まれながらにして一般的等価物であるといった考えが生まれる)。

どんな商品でも金(貨幣)で買える(交換可能)のは、それが金だから、というのが貨幣の謎です。金自身にそのような性質が備わっているように見えるのは何故か、ということです。し

かし、金ではなくても、リンネル＝上着 という関係の中では、上着はリンネルに対して、上着の使用価値そのものが価値として登場している、という訳です。

前回までのまとめに関連して、前に出ていた天秤の例では物体の目に見えない重量を鉄片で表わすのだから、鉄片は重量の塊として現れている、という理解でよい、という意見が出されました。合わせて、後の段落で出てくるアリストテレスの例にも話が及びましたが、これについてはその段落を読むときに議論することにしました。

【第9段落】 「等価物として役立つ商品の身体は、…」

等価形態の第2の特色。具体的有用労働が、抽象的人間労働の現象形態となる。

第1の特色は、等価形態にある商品に現れている価値と使用価値の関係についてであったが、今度は、抽象的人間労働と具体的労働の関係を取り上げる。

等価形態にある商品(上着)を生産するための具体的な有用労働(裁縫労働)は、抽象的人間労働の実現形態として認められる。

つまり、裁縫労働という具体的な労働が抽象的人間労働そのものの反映である。

上着の価値を見る、ということに関して、現代ではどこでそういう価値を見るのかという疑問が出されました。現代では、上着一つとっても、どれを選んだら良いかとても迷うくらい、いろいろなデザインのものがあり、その値打ちはとても簡単には分からないということです。

これに対して、デザインによって値打ちが違うというのは、有用性の評価であり、要するに使用価値が異なることだ、という意見が出されました。

また、値打ち・価値という言葉は、日常ではいろいろな意味で使われますが、商品の価値というときの価値は、限定された意味で使われているので、注意が必要と指摘されました。これを受けて、価値とは、抽象的人間労働が商品のうちに凝固したもので、という説明もありました。物の重さは目に見えないが、天秤で鉄片と釣り合うということのうちに、両者が共通して持つ重さという属性があることを見ることが出来ます。同様にリンネルと上着が交換されるという事実の内に、両者に共通な属性があることが分かります。それを価値と言っています。

この段落の本題は、等価形態にある商品—上着を作る具体的労働が、抽象的人間労働を表わしているという所にあります。第1の特色との対応を簡単に図式化すると、

上着の使用価値	…	価値	の現象形態	第1の特色
↓		↓		
具体的有用労働	…	抽象的人間労働	の実現形態	第2の特色
↓		↓		
私的労働	…	社会的労働	の実現形態	第3の特色

となるでしょうか。

【第10, 11段落】 「裁縫の形態でも織布の形態でも、…」

(10) 等価形態の第2の特色の神秘性

価値生産

リンネルの価値は、織布労働の形態で人間労働力が支出され形成される。

価値表現

リンネルの価値は、織布の、人間労働力としての属性で形成されることを表現するために、織布に対して、

裁縫(リンネルの等価物—上着を生産する具体的労働)が対置される。

↳その具体的な労働の形態のまま、抽象的人間労働の手でつかめる実現形態として現れたもの。

(11) 具体的労働が、その反対物である抽象的人間労働の現象形態になることが、等価形態の第2の特色。

具体的有用労働を投げ捨てるとはどういうことか、と質問が出されました。ですが、具体的有用労働ではなくなる、ということではなく、抽象的人間労働を表わすという性格を持つようになる、ということではないでしょうか。

議論は、抽象的人間労働や価値の出現、あるいはそれらの概念の成立の条件にも及びました。広く商品が交換されていることが前提になっています。後の段落で出てくるアリストテレスの時代は、商品の交換は偶然的で、18-19cになって初めて一般的になりました。頻繁な交換が行われるようになって、抽象的人間労働ということが分かるようになりました。

これまでも何回も出てきている「現象形態」の意味を確認しました。レジメでは実現形態とも言っています。要するに、感覚的に捉えられる形態、ということです。

物の重さの例で言うと、天秤で釣り合った鉄片は、重さ(目に見えない)の現象形態です。また、手で持ったときの筋肉の緊張感も、重さの現象形態です(この場合、分量はあまり正確には反映されないが)。いずれも、感覚的に重さが捉えられています。

【第12段落】 「しかし、この具体的労働、裁縫が。…」

等価形態の第3の特色。私的労働が直接的に社会的な形態での労働となる。

上着の現物形態を作る具体的な裁縫労働が、抽象的人間労働の表現として認められる

→その労働…リンネルの価値を形成した労働と同等性の形態を持つ。

そのことによって

裁縫労働は私的労働でありながら、同時に直接的に社会的な形態にある労働と認められる

上着は

私的労働でありながら、直接的に社会的な形態にある裁縫労働の産物だから、他の商品との直接的交換可能性を持つ。

リンネルの価値を形成した社会的な労働と同等性の形態を持つ、とはどういうことか、と質問があり議論になりました。

まず「社会的」の意味ですが、人と人との関係ということです。商品は他人の使用に供す

るために生産されるので、社会的性格を持ちます。商品の交換は、だから、社会的営みと言えます。商品が交換可能なのは、両者が同じ属性つまり価値を持つからであり、価値は抽象的
人間労働が商品の内に凝固した属性です(第1節)。したがって、抽象的人間労働は社会的性格
を持っていることが分かります。

上着を作る裁縫労働は使用価値を作る具体的有用労働であり、私的労働です。上着が等価
形態にあるとき、具体的な裁縫労働は、抽象的人間労働の現象形態となっているので、社会的
な形態にある労働、と認められることになります。

だいたい、こういうことになったかと思えます。

<抽象的人間労働について>

どの段落での議論だったか、抽象的人間労働を労働の苦勞と理解する発言があったと思
います。特に議論になりませんでした。第10, 11段落の議論をまとめていて、それで良いのだ
ろうかと疑問を感じました。すでに学んだ第1節に、

「労働生産物の使用価値を捨象するならば、」…「労働生産物の有用性といっしょに労働
生産物に表わされている労働の有用性は消え去り、したがってまたこれらの労働のいろ
いろな具体的形態も消え去り、これらの労働はもはや互いに区別されることなく、すべてこ
ごとく同じ人間労働に、抽象的人間労働に、還元されているのである。」

とあります。これを読むかぎり、労働の苦勞ということではなく、単に、人間が生産するとい
うその行為が、抽象的人間労働だと思えます。さらに言うと、「同じ人間労働」ですから、社
会的平均労働力として作用する労働です。同一の労働時間で生産された商品は、商品種類が
異なっても同じ価値を持ちます。でも商品種類が異なると、労働の苦勞は同じとは限り
ません。

このよう考えてみましたが如何でしょうか。(編集人)

◆「読む会」に参加して

資本論を読む会には昨年8月から参加させてもらっています。

参加しての感想としては、なかなかついていくのが難しく、現在は「等価形態」(第1篇「商
品と貨幣」第1章「商品」)のところまでできていますが、おぼろげながらわかった気になりま
すが、それを自分の言葉で説明するところまでは、なかなか到達できていません。

労働の価値や商品の価値など「あたりまえ」のようにお金という数字で表されそれが、な
ぜそのようになってきたのかを学ぶことは大切なことだと思います。

もっと深く考えれば、差別や搾取の問題などもそこにあるのではと思い、資本論について
これからも学んでいきたいと思えます。(N.M.)

※ 「今の説明分からない。」 「これはどういう意味？」 「これはこうではないか？」 と
いった質問・意見を出して頂くと良いと思えます。口にすることで理解が深まる思
いますし、すべての参加者の理解を深めることにも貢献すると思えます。

「資本論を読む会」便り

No. 14
2016.9.17

7月の第14回は、主催者だけになってしまいましたので、先へは進みませんでした。それで、この「便り」もお休みさせて頂きました。

8月の第15回は、常連の方々もご都合が付き、前回は埋め合わせるかのように新しく2名の参加者もお迎えし、活発な議論となりました。新参加者の方は、読むのは初めてではないそうですが、「読むことと理解することとは違う」とも言われていました。皆で「あーだ、こーだ」と議論して、理解を深めて行きたいと思います。

◆第15回の内容

編集人の復習ノートです。すべての議論を紹介しているわけではなく、編集人はこう理解した、ということです。誤解もあるかも知れません。小見出し直後の丸ゴシック体は、主に段落の内容やレジュメを要約して紹介しています。段落の本文は「資本論」を参照して下さい。便宜上、段落初めの数語と、段落番号(本文の字下げごとにカウント)を付けています(大月書店 全集版資本論による)。

これまでの全14回の簡単なまとめ

今回のところに入る前に、これまで読み進めてきた部分の概略説明ありました。

第1節 商品

商品が交換されているという事実から出発し、商品の使用価値と価値が抽出された。

第2節 労働の二重性

商品を作る労働は、使用価値を作る有用労働、価値を作る抽象的人間労働の2側面があることが明らかにされた。

第3節 A単純な価値形態 一、二、三、…

商品の価値関係の中に、価値がどのように表わされているかが分析される。相対的価値形態と等価形態が抽出された。これらの概念を把握するために、天秤によって物体の重さを表現する例えが取り上げられた。

三等価形態の最後で、等価形態の第3の特色として、私的労働が社会的労働の現象形態となっていることが指摘された。

第3節 価値形態または交換価値

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

三 等価形態

【第12段落】 「しかし、この具体的労働、…」

等価形態の第3の特色。私的労働が直接に社会的な形態での労働になる。

20エシのリンネル=1着の上着

という価値関係の中で、
上着を作る裁縫労働(有用労働) ……> 抽象的人間労働の表現として認められる。
つまり 「→リンネルの価値を形成した労働と同等性の形態を持つ。
→ 裁縫労働は、私的労働でありながら、直接に社会的な形態にある労働と認められる。
(他人の使用価値を作る労働)

「社会的労働とは社会的な平均労働と理解してよいか」という質問から議論が始まりました。司会の議論の整理が悪く(御免なさい)、この質問は肯定されたのか否定されたのかあまりはっきりしませんが、議論を通して等価形態の第3の特色の内容は段々ハッキリしてきたと思います。

まず、

20エレのリンネル=1着の上着 (20エレのリンネルは、1着の上着に値する)

という関係、すなわち

20エレのリンネルは、1着の上着と交換される

ことという事実が前提です。

この関係は、リンネルの側から見ると、

リンネルの価値は、上着の使用価値で表現されている

ことになります。したがって、

上着の使用価値は、価値を表わしている(価値の現象形態となっている)

となります(第1の特色)。

次に、上着を生産する労働は、

使用価値を生産する 具体的有用労働

と、

価値を生産する 抽象的人間労働

の2つの契機を持っています(労働の二重性)。したがって、

上着の使用価値を生産する具体的有用労働(裁縫労働)は、抽象的人間労働の現象形態
となります(第2の特色)。ここまでは、全段落までの展開の確認です。

さて、上着の生産は、他の生産者と独立して私的に営まれます(私企業)。なので、

上着を生産する裁縫労働は、私的労働

です。他方、

価値を生産する抽象的人間労働は、社会的な形態での労働

です。今、上着は等価形態の位置にあり、上着を作る裁縫労働は抽象的人間労働の現象形態となっていますから、

裁縫労働は、私的労働でありながら、直接に社会的な形態での労働となる。

という訳です(第3の特色)。

編集人は当初、抽象的人間労働は社会的労働であることがよく理解できませんでした。ですが、どの商品の価値をつくる抽象的人間労働も社会的に同等と見なされていること(それゆえ商品の交換が可能であり、交換は社会的な営為)、価値量は社会的平均労働時間で規定されていることなど、「第1節 商品」で説明されています。思うに、抽象的人間労働を単なる人間の労働(精神的・肉体的活動、労働の労苦)と解していたのかも知れません。

読む会での議論は、冒頭に示した「社会的労働とは社会的な平均労働と理解してよいか」という質問から始まったわけですが、商品(の価値)を生産する労働の社会的な同等性を含意していると思われまますので、イエスとして良いかと思えます。

そのほか、労働の生産力の上昇により(同一商品を生産する)労働の社会的な平均時間が減少するという指摘や、現場労働の体験に基づく発言がありました。リンネルを生産する労働や裁縫労働の性格、私的労働と社会的労働・具体的有用労働と抽象的人間労働の概念の確認など、いろいろと検討しました。その中で、リンネルは上着と交換される、ということが重要だと確認されたと思えます。

最後に、等価形態にある上着について

使用価値	→	価値	}として現れる
有用労働	→	抽象的人間労働	
私的労働	→	社会的労働	

というまとめの発言があり、この段落を終わりました。

【第13段落】 「最後に展開された等価形態の2つの特色は、…」

アリストテレスによる価値形態の研究。等価形態の第2・3の特色を理解するために。

第2の特色： 具体的労働がその反対物である抽象的人間労働の現象形態になること

第3の特色： 私的労働がその反対物である直接に社会的な形態にある労働になること

この2つの特色は、第1の特色(使用価値がその反対物の、価値の、現象形態になること)と較べてみると、共通しているのは、価値の実体である人間労働の次元にまで掘り下げられていることです。

このことは、アリストテレスの価値形態の分析を振り返ってみると「もっと理解しやすいものになる」。

【第14段落】 「アリストテレスがまず第1に明言しているのは、…」

アリストテレスは、貨幣形態を単純な価値形態の発展した姿として捉えた。

アリストテレスは商品の貨幣形態

5台の寝台=これこれの額の貨幣

は、単純な価値形態

5台の寝台=1軒の家

のいっそう発展した姿であること、つまりある商品の価値を任意の他の1商品で表現したもののいっそう発展した姿でしかないことを明らかにしている。

第13と14段落は、議論はあまりありませんでした。

【第15段落】 「彼は、さらに、この価値表現が…」

アリストテレスは2商品に含まれる同一の質を見出せなかった

5台の寝台=1軒の家

という価値関係のなかに、アリストテレスは、異なる商品が交換されるには「質的に等置される」こと、その上で量的な比較が可能となることを見抜いていた。

「交換は同等性なしにはありえないが、同等性はまた通約可能性なしにはありえない」

アリストテレスは、しかし、様々な商品の中に通約可能性(質的な同等性)を見出すことが出来ず、(等置は)「不可能」であるとする。そのため、「実際上の必要のための応急

手段」として商品が等置される、としている。

「経済学批判」でも、若干ニュアンスが違いますが、アリストテレスへの言及があることが報告者から紹介されました。(レジュメの3ページ)

また、近代経済学では商品の効用が交換を規定するとしているという指摘がありました。

【第16段落】 「つまり、アリストテレスは、…」

アリストテレスには、価値概念がなかった

5台の寝台=1軒の家

に表わされている、寝台と家の共通の実体は抽象的人間労働です。価値概念を持たないアリストテレスは、「そんなもの(共通の実体)は本当は存在しない」と言う他なかった。

商品の価値とは、その商品に対象化され結晶した抽象的人間労働であること(価値実体)、その大きさは商品に対象化された社会的に必要な労働時間である。

特に議論はなかったと思います。

【第17段落】 「しかし、商品価値の形態では、…」

「価値表現の秘密」が解きあかされる条件

アリストテレスが商品の価値形態の中に共通の実体を見いだすことができなかったのは、ギリシアの社会が奴隷労働を、つまり人間やその労働力の不平等を自然的基礎にしていたからである。

すべての人間が平等であり、同等であるという観念が民衆の先入見として強固になったときに、はじめて人間労働一般やすべての労働の同等性や同等な妥当性という、価値表現の秘密が解明され得る。

すなわち、商品形態が労働生産物の一般的な形態になり、すべての人々が商品所有者として互いに人格として認め合う社会、つまり資本主義社会においてこそ初めて可能である。ほとんどの労働が賃金労働者によって担われている社会、ほとんどの労働生産物が商品となって交換されている社会、資本主義社会において、人間労働の生産物という質的同等性が発見できる。

アリストテレスの天才は、「諸商品の価値表現のうちに一つの同等性を発見している」ことにある。

議論では人権宣言も話題に上り、人間の平等という観念は商品生産が発展し労働の同等性が普遍化したことが基盤となっている、ということが確認されました。

価値概念の獲得のためには、古代ギリシャは商品経済が主ではなく、未発展であったからということも確認されました。

まとめ

等価形態の第2と第3の特色を分かりやすくするために、アリストテレスの例が持ち出された訳ですが、果たして分かりやすくなったのでしょうか。議論では、良く分かったという声はあまり出ませんでした……。

※ 読む会ではこういう重要な議論もしたぞ、という点がありましたら、ご指摘下さい。(編集人)

「資本論を読む会」便り

No. 15
2016.10.25

大分涼しくなりましたが、第16回のあった9月の最終日曜日は、この時季にしては暑い日でした。そのせいではないでしょうが議論も熱のこもったものとなり、わずか3段落しか進みませんでした。著者自身がかもっとも難しいと言っている節ですから、やむを得ないところです。

◆第16回の内容

編集人の復習ノート。すべての議論を紹介しているわけではなく、編集人はこう理解した、ということです。誤解もあるかも知れません。

小見出し直後の丸ゴシック体は、本文やレジメを要約したものです。本文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落初めの数語と、段落番号を付けています(本文の字下げごとにカウント。大月書店 全集版資本論)。

第3節 価値形態または交換価値

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態 四 価値形態の全体

【第1段落】 「ある一つの商品の単純な価値形態は、…」

商品の単純な価値形態は、別商品に対するその商品の価値関係・交換関係、のうちに含まれる。

商品Aの価値

- ・質的には 商品Bの、商品Aとの直接的な交換可能性によって表現されている。
 - ・量的には 一定量の商品Bの、一定量の商品Aとの交換可能性によって表現されている。
- つまり、「交換価値」として表示されることによって、独立に表現されている。

第2節冒頭で、商品は使用価値および交換価値であると言ったが、厳密に言うとは間違い。正しくは、商品は使用価値および価値である。

商品の価値は、商品の他商品との価値関係の中でのみ、交換価値という現象形態をとることを心得ておけば、先の言い方も有害ではなく、簡単化の役に立つ。

報告は、単純な価値形態とは何だったかの復習から始まりました。

20エルのリンネル = 1着の上着		の図解
リンネルの使用価値	① 上着の使用価値	… ①は目に見える
リンネルの価値	② 上着の価値	… ②は目に見えない

③ ~~リンネルの価値 = ③ 上着の使用価値~~

- ① 商品の交換関係は使用価値の交換割合として我々に見える
- ② 商品が交換されるということは、これらが同質(価値)で量的に比較可能商品の等置は、2商品の価値が等しいという、価値関係を表わす何が等しいのか、直接には見えない。(価値は目に見えない)
- ③ リンネルは、上着の使用価値で自分の価値を表現している。

1. 交換関係 図の①。2商品が互いに交換されるという関係です。
2. 同等性関係 交換される2商品は共通な属性(質)を持ち、その量が等しいという関係にあります。
- 3, 4. 価値関係 図の②。2の商品が持つ共通な属性とは価値です。だから2商品の同等性関係は価値関係です。交換関係におかれた2商品を、価値という側面から見た関係と言えるでしょうか。
5. 価値表現 図の③。価値関係したがつて交換関係の中に、一つの商品の価値表現が潜んでいます。この場合リンネルの価値を上着の使用価値で表現しています。
6. 交換価値 図の①。20エレのリンネルの交換価値は1着の上着です。
7. 価値形態 価値を表現する形・形式・方式(Form)。2商品の交換関係は単純な価値形態になっています。

レジュメを整理するとこのようになるでしょうか。(6, 7は編集人が追加しました。)

これを受けて、1本の缶コーヒーと1冊の本が交換されるという例が持ち出され、いずれも労働生産物であり、両者に共通なものは、社会的労働時間によって決定される価値である、という理解で良いかと問題提起がありました。

これに対して報告者から、等しい「=」というのは価値として等しいということだが、量的関係は後回しにして、まず質の面から考えねばならない。A=Bという交換関係・価値関係の中に価値表現の形態があること、それはどういう仕組みで価値表現をしているか、その場合のAやBの性格(役割, 機能, 働き)はどうなのか、といったことが主要な問題であるとの説明がありました。

なお、単純な価値形態とは、前ページ下の図の③の価値表現が、それに当たります。

<内在的>

レジュメに資料として引用されている、等価形態についての説明文、

「...。ただ商品Aの価値の大きさは、それと交換される商品Bの使用価値の量によって表現されているのです。だから商品Aの価値量は、ある与えられた内在的な量なのですが、それはそれと交換可能な商品Bの使用価値量によって目に見える形で表現されているのです。...」

の中の、内在的とはどういう意味かと質問がありました。

価値・価値量に絡めての議論になりましたが、要するに、他とは関わりなくそれ自身を持つ・含む性質・属性ということです。例えば、「関取は重い」というのは、他の力士や一般人と比較しての関取の性質です。それに対して、「関取の体重は220 kgである」というのは、他の人との比較ではなく関取自身に「内在」する性質です(ただし、表現はキログラム原器と比較してですが)。

<直接的交換可能性>

「商品Aの価値は、質的には、商品Aとの商品Bの直接的交換可能性によって表現される。」とはどういう意味か、議論になりました。これは、「三等価値形態」の最初の段落で、「1商品の等価形態は、その商品の他の商品との直接的交換可能性の形態である。」と述べられているのですが、そこでも議論になり、なかなか理解が難しいところです。

本=缶コーヒー のような例も出され、検討しました。缶コーヒーも上着も、等価形態に

あるということは、見かけは異なっても実は価値そのものになっています。従って、

本＝「価値」(本に対して)

リンネル＝「価値」(リンネルに対して)

となります。価値ですから、それぞれ本、リンネルと 直接交換可能だ、という訳です。

1個のリンゴ＝100円 のような場合、100円は等価形態にあります。100円を持っていくと直ちにリンゴと交換できますから、100円には直接的な交換可能性がある、という説明もありました。リンゴも商品ですから、交換可能性はある訳です。ですが、100円の方が直接的だということです。

※ ここはなかなか分かりにくいところで、次回、報告者からもう一度説明してもらうことになっています。編集人も期待しています。

<直接的>

何かある事柄を理解するために、その反対の事柄を想起して考えてみるということは良くあります。ですが、直接的交換可能性に対して、「間接的」交換可能性というのがありません。ただ、直接的っていうと、つい、間接的を連想するので、訳語が良くない、「そのまま」とかの方が分かりやすい、原語はなんだろう、という話が出ました。調べてみると、unmittelbaren でした。間、中間がない、といった意味のようです。因みに英訳は directly でした。

<価値関係と交換関係>

報告者が、この段落の第2文(センテンス)と第3文を要約して、

第2文 商品Aの価値は、質的には商品Bとの価値関係によって表現される。

第3文 商品Aの価値は、量的には商品Bとの交換関係によって表現される。

とまとめたのに対し、この段落の最後の方に、「…第2の異種の商品にたいする価値関係または交換関係のなかで…」とあるので、価値関係も交換関係も同じことではないのか？ と疑問が出されました。ですが、価値関係は交換関係の内に潜んでいる、という関係ですから、同じことというわけではないでしょう。1ページの図を見ていただくと分かりやすいと思います。報告者は、価値関係は交換関係の内実、と、説明しました。

<交換価値>

次に、「一商品の価値は、『交換価値』としてのその表示によって、独立に表現されている。」の部分も議論になりました。

交換価値というのは、1つの商品では見えません。1商品が他の商品と交換関係を取り結ぶことによって、この「他の商品」が、1商品の交換価値となります。

20エレのリンネル＝1着の上着

の中では上着のことです。この上着は、等価物すなわち価値の現象形態であることが明らかになっていますから(分析によって)、リンネルの価値を表現していることとなります。

【第2段落】 「われわれの分析が証明したように、…」

重商主義者も近代自由貿易商人も、価値および価値の大きさが交換価値としてのそれらの表現様式から生じると、逆に考えてきた。

商品の価値形態または価値表現 <= 商品に内在している価値が現象

交換価値としての表現様式 => 価値や価値の大きさ ではない。

これまでブルジョア経済学者たちは逆転して考えてきた。

重商主義者

価値表現の質的な側面に、等価形態の完成姿態である貨幣に、重きを置いた。

近代的自由貿易行商人たち

相対的価値形態の量的側面を重視（自分の商品をどんな価格でもたたき売らなければならないから）

いずれも、商品の価値も価値の大きさも商品に内在するものとは見えず、交換関係によるそれらの表現に固執し、日々の物価表のうちに存在するものとみなした。

これまで、重商主義者も近代的自由貿易商人たちの誰もが、価値形態あるいは交換関係が価値や価値量を規定すると、逆に考えてきた、ということです。

真実は、商品を生産する社会的平均労働が商品に凝固したものが価値であり(第1節)、この商品に内在する価値が、交換関係・価値形態として現れているのです。

【第3段落】 「商品Bに対する価値関係に含まれている …」

商品の単純な価値形態は、商品に含まれる使用価値と価値との対立の単純な現象形態

商品A： 使用価値 と 価値 を内包 …… 内的対立

↓

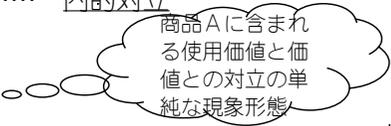
↓

↓

商品Aの価値表現： 商品A = 商品B

相対的価値形態 等価形態

使用価値 交換価値(価値) …… 外的対立



商品Aに含まれる使用価値と価値との対立の単純な現象形態

<対立, 内的対立, 外的対立>

ここでは、使用価値と価値が対立しているとはどういうことか、また内的とか外的とはどういうことか、が議論となりました。

まず、商品の使用価値と価値は互いに他を必要としていると言うか前提としています。商品は使用価値であると共に価値ですから、使用価値でないものは商品たりえませんし、価値でない使用価値(自分で食べるために炊いたご飯など)も商品ではありません。

他方、商品の価値と使用価値は、互いに排除し合う関係にあります。使用価値には価値は含まれていませんし、価値は物理的な実在ではないので使用価値を含んでいません。

商品の使用価値と価値のこのような関係を対立といっているようです。

この関係(対立)は、1つの商品(の内部)での話です。

ところが、リンネル=上着 という単純な価値形態、あるいは価値表現においては、リンネルという使用価値の価値が1着の上着で表わされています。したがって、リンネルの使用価値と価値の対立が、2商品にまたがって、つまりリンネルと上着によって表わされています。これが、外的対立ということになります。

※ お詫び: 「資本論を読む会」 便り No.15 を、紙版・email版で受取られた方へ

発行日付が、予定日の10月10日になっていました。実際の発行日は、このWeb版にあるように、10月25日でした。また、重商主義を重量主義とするなどの誤字もありました。ご迷惑をおかけしました。

「資本論を読む会」便り

No. 16
2016.11.21

今年の秋は暑い日が続いたり急に寒くなったりで、体調を崩されてお休みになられた方もおられました(お大事に)。他方、久しぶりの参加者や、2名の新しい参加者をお迎えし、賑やかな例会となりました。

今回は、例会の後、懇親会をもちましたが、ほとんどの方が参加され、こちらの方も大いに盛り上がりました。

◆第17回の内容

編集人の復習ノート。すべての議論を紹介しているわけではなく、編集人はこう理解した、ということです。誤解もあるかも知れません。

小見出し直後の丸ゴシック体は、本文やレジュメを要約したものです。本文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落初めの数語と、段落番号を付けています(本文の字下げごとにカウント。大月書店 全集版資本論)。

冒頭Nさんから、ドイツの大学では学生の要望で資本論の講座が開設されることが増えているそうだ、という興味深いお話がありました。日本ではどうなのでしょう。

☆これまでの概略

新参加の方がおられましたので、報告者からこれまでの概略の説明がありました。その内容は割愛しますが、「便り」のバックナンバーも見て頂ければ参考になるかと思えます。

ここでは、20エレのリンネルの「エレ」って？ という質問がありました。資本論が書かれた当時使われていた長さの単位ですが、こうした例は他にも出てきます。

世界の結びつきが強くなっていくのは歴史の一般的傾向です。資本主義経済はこれを急速に押し進めてきました(摩擦もあります)。その結果、度量衡の単位も世界的な統一に向かって進んでいます。SI国際単位(mやkgなど)というのがそれです。

第3節 価値形態または交換価値

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態 四 価値形態の全体

前回の復習の後、「三 等価値形態」以来何度も議論になっている、「等価物の直接的交換可能性」について報告がありました。

☆直接的交換可能性について

商品の「直接」的な存在は、その使用価値である。

∴価値として現れるような形態を持たないと交換されない。

∴価値を目に見える形態で表すことのできる商品 = 直接的交換可能性の形態にある商品となる。

直接的交換可能性が問題にされる理由

等価形態が貨幣にまで発展すると、

→「金(カネ)があればなんでも買える」という貨幣の強力な特質として現れる。

貨幣のこの性質

貨幣そのものが持っている魔力のように見える … これは間違い

実は、等価形態におかれた商品が、一方的に押しつけられた性質

ということを明らかにするため。

「商品Aの価値は、質的には、商品Bの商品Aとの直接的交換可能性によって表現されている」の

(1)「質的には」の意味

商品Aの価値の量ではなく、価値そのものが如何に表現されるかが問題になっている。

(2)「直接的交換可能性」とは、

等価形態にある商品が、相対的価値形態にある商品の価値を、その自然形態で表していること。

金が価値を表している(等価形態にある)ことから直接的交換可能性を持っていることを示していることと同じ。

ここには量的な規定は全く含んでいない。

商品には価値という属性があるので、商品は他の商品に対して交換可能性を持ちます。しかし、例えばリンネルが商品であることは、リンネルを見ただけでは、つまり単独では分かりません(使用価値であることは分かります)。ところが、

20エレのリンネル=1着の上着 (20エレのリンネルは、1着の上着に値する)

という交換関係に置かれると、事態は変わります。

このリンネルは価値という属性を持ち、商品である。

リンネルの価値は、上着で表されている。

ということになります。なので、ここでは、

この交換関係: リンネルの価値が表現されている → 単純な価値形態

リンネル: その価値が表現されている → 相対的価値形態

上着: 価値そのものという役割を負わされている → 等価形態

ということになるでしょう。

この単純な価値形態の中で、

上着は、価値そのものが物体の形をとったもの

として現れています。上着は今や上着ではなく、価値そのものですから、他の商品に対して直接的交換可能性を持つ、というわけです。

ただし、それはこの単純な価値形態の中での話ですから、他の商品といってもリンネルだけです。

報告者の説明は、大体こんな風に理解できるのではないかと思います。

あと、等価形態にある上着の交換可能性が「直接的」である、という点について。ここでは上着は価値そのものとして現れていますから、リンネルのように他の商品でもって自分には価値という属性があることを表現する必要がない、ということではないかと編集人は考えています。如何なものでしょうか。

また、これに関連して、これまで等価形態・等価物の「等価」は価値が等しいという意味

だと考えていましたが、そうではなく価値と等しいという意味ではないか、と考えるに至りました。これはどうでしょうか。

議論の方は、まず、直接的交換可能性については、交換関係が前提となっていることが確認されました。商品Aは商品Bと交換できる、ということが出発点です。この関係が、実は商品Aの価値表現になっている、単純な価値形態であると続きます。この関係の下で、商品Aと商品Bとは、それぞれ異なる性格・役割を持っており、それらが詳しく分析されているのです。

次に、使用価値と価値の概念について質問がありました。これは第1節、第2節で学んだところで、いろいろな人から説明がありました。昔、自給自足であったが、生産力が大きくなり余剰生産物が生まれるようになると、これらを交換することが始まる。これが商品の発生。生産物の交換が一般的になると、生産物に価値という属性が備わるようになります。したがって、生産物を交換するという人間と人間の関係が、生産物の価値という属性となって表れている、という説明もありました。これは次の第4節で出てきます。

直接的交換可能性ということについて、そのような可能性を持った商品とは、周りが交換したいと思うような商品ということではないか、という意見がありました。特に議論にならなかったようですが、「周り」とは何か、「思う」主体は誰か、が良く分かりません。

レジュメに、「それは等価形態におかれた商品が、ただ一方的に押しつけられた性質にすぎず」とあるが、どういう意味か、と疑問が出されました。等価形態に置かれた商品は「直接的交換可能性」という属性を持ちますが、その商品自身から生まれたものではないということです。等価形態に置かれる、ということから生じるので「一方的に押しつけられた」、別に上着が望んだことではないということです。これについては、王と臣下の関係の例をあげて説明して下さった方もおられました。

あと、商品の価値とか、ブランド物なら直接的交換可能性がある？とか、議論は多岐に渡りかなり時間を要しました。初めて参加された方には難しかったのではないかと思います。「分かってきたぞ」との発言もあり、次に進むことにしました。

時間の関係もあり、第4段落から最後の第7段落まで進んで、「四 単純な価値形態の全体」を終わらせました。少し議論もありましたが、紙面の都合で割愛し、各段落の要点だけをまとめておきたいと思います。

【第4段落】 「労働生産物は、どんな社会状態の中でも使用対象であるが、…」

単純な価値形態の歴史的考察

1. 労働生産物は、どのような社会でも使用対象である。
2. 労働生産物が商品となるのは、ただ、ある歴史的発展段階においてに過ぎない。
3. その歴史的発展段階とは、生産に支出された労働が、その生産物の「対象的」属性＝生産物の価値として表わされる、歴史的な一時期である。
4. 商品の単純な価値形態は、単純な商品形態である。商品形態の発展は価値形態の発展と一致する。
5. 価値形態は商品生産の滅亡と共に滅亡する。

(以下の5・6・7段落で)「全体的な、または展開された価値形態」への移行

【第5段落】 「単純な価値形態、すなわち…」

単純な価値形態は、価格形態にまで発展する萌芽形態である。

【第6段落】 「ある一つの商品Bでの表現は、…」

単純な価値形態の不十分な点

単純な価値形態 リンネル＝上着 は、

- ① リンネルの、上着以外の他の商品との質的な同等性・量的な割合、を表わしていない。
- ② 上着は、リンネルに対して等価形態＝直接的交換可能性の形態、を持つだけである。

【第7段落】 「とはいえ、個別的な価値形態はおのずから …」

単純な価値形態の、より完全な価値形態への移行

単純な価値形態で、リンネルの価値を表わす商品は上着でなくとも差し支えない。

∴ リンネルが任意の商品と価値関係に入るに依り、様々な単純な価値形態が生ずる。

リンネルの価値形態の数の上限は、リンネルと異なる商品種類の数。

リンネルの個別的な単純な価値形態の全体

→ 「全体的な、または展開された価値形態」

◆ 「読む会」に参加して

これまで数回出席させていただいて、少しは資本論の理解(誤解?)が深まったのではと思えるところを、率直に書いてみることにしました。二点あります。

① 商品(労働生産物)の使用価値は感覚的に目に見えるが、価値(抽象的人間労働の凝固物であること)は感覚的には目には見えず、他の商品との交換関係のなかで他の商品と交換できる何か同質のものが共通に二商品に内在するのでは、ということから、商品(労働生産物)を生み出す過程である労働を分析し、有用性を形成する有用労働と労働過程での生理的エネルギー支出＝抽象的人間労働とを区別し社会的抽象的人間労働の凝固物としての商品が価値であり諸商品に共通に内在(実在)するものである、という結論(抽象)にマルクスは至ったと思いますが、

② この目に見えない価値をどのようにして目に見えるように表現するのか？

X量の商品AはY量の商品Bに値する、ということで目には見えないX量商品Aの価値を、目に見えるY量の商品Bの使用価値で表現する。

X量商品AはY量商品Bに値する(等価だ)とAが言うことでBはAとは直接交換可能となる。

この時、AはBとの関係で相対的に自己の価値を表現し、相対的価値形態を受け取る。BはAとの直接交換可能性を持ち等価形態という役割を受け取る。

等価形態にある商品Bが直接的交換可能性を持つということは、X量の商品AがY量の商品Bに等しい(値する)という表現で商品Aが商品Bに値する(交換してほしい)というから、商品Bは受動的にAとの直接的交換可能性を受け取るということであるらしい。

以上のような理解(誤解?)に達していますが、また皆様のご意見賜りたく存じます。(N)